



## コロナ禍の巣ごもりの中で

民主国家の盟主アメリカの指導者を選ぶ「アメリカ大統領選挙 2020」は、世界を揺さぶってきた「トランプ政治」の継続か、それとも終幕か... 世界が注目する選挙の行方は最後の最後まで波乱含みでした。



ところで、新型コロナウイルスによる外出自粛生活によって、間違いなく私たちの暮らしは大きく変わりました。

外食や旅行などの外出型消費ははばかられ激減する一方、家の中で楽しむ「巣ごもり消費」が活発化して、ネット通販や動画配信サービスなどのデジタル消費の流れが加速するなど、消費構造も大きく変わった気がします。それでも、ここにきて少し外出型消費も増えつつあり、しばらくは様子見の状況が続くでしょう。私の生活様式でも変わったことといえば、テレビ視聴時間が増えたことが真っ先に挙げられます。おりしも NHK 大河ドラマ「麒麟がくる」も佳境に入り、コロナ禍の中での新作番組の制作もままならない事情からか、NHK アーカイブの秀作「歴史ヒストリア」関連番組が目白押しです。私は大学入試を「世界史」で臨んだため、「日本史」は疎遠になっていましたので、やっと”ガッテン”の状況です。先日も、長篠の戦い・本能寺の変・関ヶ原の戦い・大坂の陣など、迫力の合戦シーンが続々登場する「戦国大合戦」を鑑賞しました。アジアに迫るヨーロッパ勢力と信長・秀吉・家康の熾烈な駆け引きの数々、大航海時代のヨーロッパと日本が強く結びつき、地球規模で歴史を揺るがしていた事実が明らかにされていました。驚いたことは、当時の日本には合わせると三十万丁の鉄砲が存在したことです。同時期のヨーロッパ諸国が持つ数をはるかに上回ったそうです。更に、信長・秀吉と、来日したキリスト教の宣教師、そして背後にいたポルトガルやスペインとの深い繋がりが理解できました。それぞれの思惑と、熾烈な駆け引きがあり、徳川家康の天下取りの時代には、オランダ商人と家康が深く関わっています。当時、世界の産出量の3分の1を占めた日本の銀をめぐる、オランダと超大国スペインの間に激しい攻防が始まり、戦国日本は覇権をかけた両国の争いの最前線となったのです。（「キリシタンの迫害」「長崎出島でのオランダ貿易」などのマターも整理がつかしました...）一方で、NHK 連続テレビ小説「エール」も時折楽しんでいきます。主人公のモデルとなった古閑裕而の作品には、私が幼少時に蓄音器で聴いていた「長崎の鐘」の外、「栄冠は君に輝く（全国高等学校野球大会の歌）」「六甲おろし（阪神タイガースの歌）」「闘魂こめて（巨人軍の歌）」などスポーツシーンを彩る応援歌、そして「東京オリンピックマーチ」など数々ありますが、意外だったのが県内の学校の運動会等の行事や、各競技団体、地域のスポーツ大会等で子どもから大人まで幅広い世代に親しまれる「月山の雪」の作曲も、手掛けられていたのです。（永く未来に受け継いでいってほしいスポーツ県民歌です。）

